

第1問 基礎編①（解答）

解答 （配点 3点）

（借方）仕	入	705,000	（貸方）買	掛	金	560,000		
				当	座	預	金	140,000
				現		金		5,000

解説

商品を購入した際に発生する費用のことを、仕入諸掛といいます。
仕入諸掛が発生した場合は、すべて仕入に含めて処理します。

第2問 基礎編②（解答）

解答 （配点 3点）

（借方）現	金	500,000	（貸方）売	上	1,000,000	
	受	取	商	品	券	350,000
	受	取	手	形		150,000

解説

本問では、他社が発行した商品券を受け取ったときの処理を確認しました。他社が発行した商品券を受け取ったときは、後に商品券の発行者からお金を受け取ることができるので、受取商品券勘定（資産）として処理します。

その他、他人振出小切手は金融機関に持ち込めばいつでも現金に換えることができるため、受け取ったときに現金勘定として処理する点に注意してください。

第3問 基礎編③ (解答)

解答 (配点 各3点、合計9点)

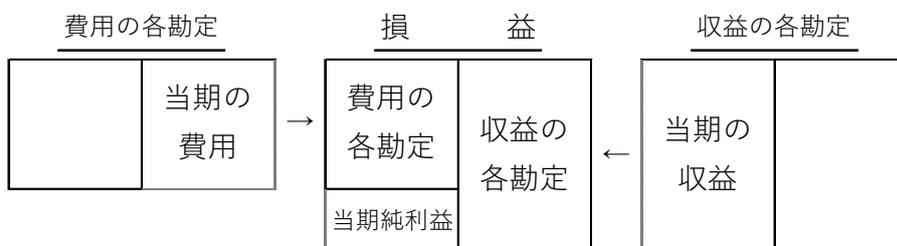
- ① (借方) 諸 収 益 10,000,000 (貸方) 損 益 10,000,000
- ② (借方) 損 益 7,000,000 (貸方) 諸 費 用 7,000,000
- ③ (借方) 損 益 3,000,000 (貸方) 繰越利益剰余金 3,000,000

解説

帳簿の締切のうち、収益、費用の締切の問題です。ポイントは、収益、費用勘定の残高を損益勘定に振り替え、損益勘定の締切の際、損益勘定の残高を繰越利益剰余金勘定に振り替えるという点です。

損益勘定は、収益、費用勘定を締め切るとともに、当期純利益を計算するために作成する勘定です。全ての収益、費用の年間の残高が損益勘定に振り替えられるので、その差額で当期純利益を計算することができます。帳簿上、損益勘定の残高は繰越利益剰余金勘定へ振り替えられます。繰越利益剰余金勘定のイメージは、「利益の貯金箱」です。獲得した利益は繰越利益剰余金勘定に蓄えられ、反対に損失を出してしまったとき、あるいは配当を行ったときは繰越利益剰余金勘定が減少することになります。

☆ 図解 収益、費用勘定の損益勘定への振り替え



すべての収益勘定の残高と、費用勘定の残高を振り替えることで、損益勘定の貸方に収益の各勘定残高、借方に費用の各勘定残高が集計されるため、差額で当期純利益を求めることができます。

第4問 基礎編④（解答）

解答 （配点 各3点、合計6点）

簿記上現金勘定で処理するもの … ①、②、⑥、⑦

期末の現金勘定残高 … 2,520,500円

解説

簿記上、現金で処理するものの項目を確認するための問題です。簿記上は、現金（通貨）の他にも現金として処理するものがあります。3級では、他人振出小切手、送金小切手、郵便為替証書の3つを押さえましょう。その他、間違いやすい項目もありますので、それぞれどのように処理するのかを確認しておきましょう。

- ① 現金 … 現金
- ② 他人振出小切手 … 現金
- ③ 自己振出小切手 … 当座預金の増加（当座預金の減少の取り消し）
- ④ 郵便切手 … 貯蔵品（使用したときは通信費勘定で費用処理）
- ⑤ 収入印紙 … 貯蔵品（使用したときは租税公課勘定で費用処理）
- ⑥ 送金小切手 … 現金
- ⑦ 郵便為替証書 … 現金
- ⑧ 受取商品券 … 受取商品券（資産勘定）

第5問 基礎編⑤（解答）

解答 （配点 ①…各3点、②…4点 合計10点）

- ① ・ 売上原価の計算を仕入勘定で行う方法
 (借方) 仕 入 178,000 (貸方) 繰 越 商 品 178,000
 繰 越 商 品 164,000 仕 入 164,000
- ・ 売上原価の計算を売上原価勘定で行う方法
 (借方) 売 上 原 価 4,185,000 (貸方) 仕 入 4,185,000
 売 上 原 価 178,000 繰 越 商 品 178,000
 繰 越 商 品 164,000 売 上 原 価 164,000
- ② 当期の売上総利益 1,301,000円

解説

売上原価の算定は、仕入勘定で行う方法、売上原価勘定で行う方法の2方法があります。まずは仕入勘定で行う方法を押さえましょう。そして、売上原価勘定で行う方法は苦手としている方も少なくありませんが、やっていることは仕入勘定で行う方法と同じであり、仕入勘定で行う方法を押さえられていれば何も難しくありませんので、ここで確認してください。

売上原価の計算を売上原価勘定で行う方法では、まず、売上原価の計算を売上原価勘定で行うのですから、仕入勘定の残高(当期商品仕入高)の金額を売上原価勘定に振り替えます。あとは、普段「仕・繰・繰・仕(または仕入・繰商・繰商・仕入)」として行っている仕訳の「仕入」を「売上原価」に換えるだけです。普段は仕入勘定で行っている計算を売上原価勘定で行うため、仕入勘定の代わりに売上原価勘定を用いるのです。

☆ 売上総利益の計算

・ 売上原価の金額

期首商品棚卸高 178,000 円 + 当期商品仕入高 4,185,000 円 - 期末商品棚卸高 164,000 円
= 4,199,000 円

・ 売上総利益

売上高 5,500,000 円 - 4,199,000 円 = 1,301,000 円

※ 「仕、繰、繰、仕」の仕訳の意味するところをしっかりと理解していただきたいと思います。以下に(参考)としてケースごとにわけて解説を作りました。(GW合宿企画の第1回計算大会のときに掲載した内容と同じです。)まだご覧になっていない方は是非ご一読ください。

(参考) 仕入、繰商、繰商、仕入(仕、繰、繰、仕)の仕訳の意味

3分法における売上原価算定の内容は3級の重要論点の一つであり、多くの方が習得するのに時間がかかる場所です。しかし、意外と2級に進まれた方でも、「仕、繰、繰、仕」と取り敢えず仕訳をしていて、結局この仕訳は何を意味しているか、あまり解っていない方がいらっしゃいます。是非、内容をしっかり理解した上で仕訳できるようになっていただきたいと思います。

「仕、繰、繰、仕」の仕訳は、当期の売上原価を算定するための仕訳です。当期の売上原価(費用)を正しく計算することで、当期の売上(収益)と対応し、正しい利益の計算をすることができます。しかし、文字だけの説明ではわかりにくいので、具体的な数字を使いながら「仕、繰、繰、仕」の仕訳の意味を考えていきます。

[すべてのケースに共通する事項]

当期商品仕入高 … 150,000 円、 当期の売上高 … 200,000 円

[ケース1] 期首、期末に商品の在庫が存在しない場合

[ケース1]は、商品の在庫が期首にも期末にもない、最も単純なケースです。3分法では、商品を仕入れたときに仕入勘定(費用)で仕訳をします。したがって、期末時点での仕入、売上勘定は次のようになります。

仕 入		売 上	
150,000			200,000

仕入は、売上原価を計算するための勘定です。在庫がない場合は、特に何も調整しなくても仕入=売上原価になります。在庫がないということは、当期に仕入れた商品150,000円が全て販売されて、お客さんの手元に渡っており、その代金としてお客さんから200,000円を受け取ったということなので、売上勘定と仕入勘定(売上原価)の差額50,000円がそのまま正しい利益となります。したがって、在庫がなければ、「仕、繰、繰、仕」の仕訳は行われません。

[ケース2] 商品の在庫が期首に10,000円存在する場合

[ケース2]では、期首のみ在庫がある場合を考えます。この場合の期末時点(決算整理前)の各勘定残高は次のようになります。

繰越商品	仕 入	売 上
10,000	150,000	200,000

もし、このまま何も仕訳をしなかった場合は、当期の利益は [ケース 1] と同じ、50,000 円と計算されます。しかし、期首に商品 10,000 円が自分の手元にあり、期末には無いということは、この期首商品 10,000 円もお客さんの手に渡っているということです。

つまり、200,000 円の収益（売上）を獲得するためにかかった費用（売上原価）は、当期に仕入れた 150,000 円だけではなく、期首に持っていた商品 10,000 円も含めた 160,000 円になります。

したがって、このままでは仕入勘定の金額が正しい売上原価の金額にはなりません。そこで正しい売上原価の金額にするために、期首商品（繰越商品）の金額を仕入勘定に振り替える仕訳を行います。これが「仕、繰」の仕訳です。

(借方) 仕入 10,000 (貸方) 繰越商品 10,000

この仕訳を勘定に転記します。

繰越商品		仕入		売上	
10,000	10,000	150,000			200,000
		10,000			

これで、仕入勘定の残高が正しい売上原価の金額である 160,000 円に修正されるのと同時に、手元に商品はありませので、繰越商品勘定 (B/S の商品勘定) の残高もゼロになり、期末時点の状況を正しく勘定に反映させることができます。

以上より、このケースでは正しい利益の金額は 200,000 円 - 160,000 円 = 40,000 円 となります。

[ケース 3] 商品の在庫が期首に 10,000 円、期末に 20,000 円存在する場合

[ケース 3] では、期首、期末ともに在庫がある場合を考えます。これが通常、問題として出題されるケースです。

期末に在庫があっても、期首商品についての考え方、及び決算整理仕訳「仕、繰」は同じです。期首商品についての仕訳と、それを反映した各勘定は [ケース 2] と同じになりますので、[ケース 2] をご確認ください。

さて、期首の処理のみ行った状態では、売上原価が 160,000 円、つまりお客さんの手に渡った商品が 160,000 円になっています。しかし、このケースでは期末時点で、自分の手元に商品が 20,000 円存在しています。

したがって、当期にお客さんの手に渡った商品は、期首商品と当期仕入の合計 160,000 円から、期末時点で手元に残っている商品 20,000 円を引いた、140,000 円ということになります。この 140,000 円が、200,000 円の収益（売上）を獲得するためにかかった費用（売上原価）です。

以上の状況を勘定に反映させるため、仕入（売上原価）を減らし、繰越商品（資産）を増やす仕訳を行います。

これが「繰、仕」の仕訳です。

(借方) 繰越商品 20,000 (貸方) 仕入 20,000

この仕訳を [ケース 2] の勘定に追加で転記します。

繰越商品		仕入		売上	
10,000	10,000	150,000	20,000		200,000
20,000		10,000			

これで、仕入勘定の残高が正しい売上原価の金額である 140,000 円に修正されるのと同じ時に、繰越商品勘定 (B/S の商品勘定) の残高が 20,000 円になり、期末時点の状況を正しく勘定に反映させることができます。

以上より、このケースでは正しい利益の金額は 200,000 円-140,000 円=60,000 円 となります。

いかがでしょうか。問題演習のときは時間制限があり、ゆっくり考えている時間はないので、普段の勉強の中で今一度じっくりと意味を考える時間をとり、是非内容を理解して仕訳を切れるようになりましょう！

第7問 応用編②（解答）

解答 （配点 各3点 合計6点）

①	（借方）	建物	2,970,000	（貸方）	当座預金	2,860,000
		仮払消費税	290,000		現金	400,000
②	（借方）	減価償却費	82,500	（貸方）	建物減価償却累計額	82,500

計算過程

① 建物の取得原価

購入代価 2,600,000円 + 不動産業者への手数料 300,000円 + 登記手数料 70,000円
= 2,970,000円

仮払消費税

- ・ 建物 2,600,000円 × 10% = 260,000円
- ・ 不動産業者への手数料 300,000円 × 10% = 30,000円

合計 290,000円

② 減価償却費

2,970,000円 ÷ 24年 × 8ヶ月 / 12ヶ月 = 82,500円

解答のポイント

固定資産の取得原価は、購入代価（固定資産そのものの代金）と付随費用（固定資産を取得するために要した各費用）の合計です。なお、税抜方式によった場合には、消費税相当額は固定資産に含めず、仮払消費税勘定で処理します。

問題文の金額は、税抜きの金額となっているので、消費税額を別途計算する必要があります。なお、登記手数料には消費税が課税されないという指示がありますので、これを適切に処理する必要があります。

期中に固定資産を取得した場合の減価償却費の計算は月割り計算を行います。なお、月の途中に取得した場合には、1ヶ月未満の端数を1ヶ月に切り上げて計算する点に注意して下さい。

第8問 応用編③（解答）

解答 （配点 ①…3点、②…各3点、③…3点 合計12点）

①	（借方）	貸倒引当金	30,000	（貸方）	売掛金	30,000
②		受取手形勘定残高	800,000円			
		売掛金勘定残高	2,000,000円			
③	（借方）	貸倒引当金繰入	69,000	（貸方）	貸倒引当金	69,000

解説

問題文で与えられている資料から、解答に必要な勘定を完成させ、仕訳や勘定残高を求める問題です。

まずは [資料] の (2) ~ (5) についての仕訳を行います。(3) は「問い①」の解答であり、解答するためには貸倒引当金勘定の残高を求める必要があります。

貸倒引当金残高

- ・ 前期末 (= 当期首) 受取手形勘定残高 500,000 円
+ 前期末 (= 当期首) 売掛金勘定残高 1,000,000 円 = 1,500,000 円
- ・ 1,500,000 円 × 3% = 45,000 円
- ※ [資料] 6 に期末売上債権残高に対して、每期 3% の貸倒引当金を設定してありますので、前期も期末受取手形、売掛金残高に対して 3% の貸倒引当金を設定しています。そうすると、貸倒額 30,000 円は貸倒引当金勘定残高の 45,000 円の範囲内ですので、全額貸倒引当金勘定を取り崩す処理を行います。

☆ [資料] (2) ~ (5) の仕訳

- (2) (借方) 売掛金 12,000,000 (貸方) 売上 15,000,000
 受取手形 3,000,000
- (3) (借方) 貸倒引当金 30,000 (貸方) 売掛金 30,000
- (4) (借方) 当座預金 10,970,000 (貸方) 売掛金 10,970,000
- (5) (借方) 当座預金 2,700,000 (貸方) 受取手形 2,700,000

これと、[資料] (1) の当期首残高の資料を合わせて、各勘定を完成させます。

期首	500,000	回収	
売上			2,700,000
	3,000,000		
		期末	800,000

	15,000,000
--	------------

期首	1,000,000	回収	
売上			10,970,000
	12,000,000	貸倒	30,000
		期末	2,000,000

貸倒	期首	45,000
	30,000	繰入 (差額)
期末	84,000	69,000

第9問 応用編④（解答）

解答 （配点 各3点 合計21点）

- | | | | | |
|---|------------|-----------|-----------|-----------|
| ① | （借方）支払保険料 | 4,800,000 | （貸方）当座預金 | 4,800,000 |
| ② | （借方）前払保険料 | 800,000 | （貸方）支払保険料 | 800,000 |
| ③ | （借方）支払保険料 | 800,000 | （貸方）前払保険料 | 800,000 |
| ④ | （借方）支払保険料 | 5,040,000 | （貸方）当座預金 | 5,040,000 |
| ⑤ | （借方）前払保険料 | 840,000 | （貸方）支払保険料 | 840,000 |
| ⑥ | 4,000,000円 | | | |
| ⑦ | 5,000,000円 | | | |

解説

費用（保険料）の前払いがあったときの会計処理を問う問題です。更新のタイミングで保険料が変更になるという、この論点の中でも最も難しいタイプの問題といえます。

仕訳を順を追って確認するとともに、支払保険料、前払保険料の各勘定をつくり、構造を理解しましょう。解説では、言葉での説明を行います。是非、後ほどご自身で支払保険料勘定、前払保険料勘定を2期分書いて、説明の内容と照らし合わせてみてください。

・ ×1年度

6月1日に保険契約を締結し、向こう1年分の保険料4,800,000円を支払っています。支払保険料勘定の決算整理前残高は、この4,800,000円となっています。しかし、当期中に保険というサービスの提供を受けたのは、×1年6月から×2年3月までの10ヶ月分だけであり、残りの2ヶ月分については、翌期にサービスの提供を受けるものです。正しい利益の計算を行うためには、サービスの提供を受けた10ヶ月分のみを当期の費用とする必要があります。したがって、まだサービスの提供を受けていない2ヶ月分の保険料を当期の支払保険料から削り、前払保険料に振り替えます。これが②の仕訳です。

☆ ×1年度の保険料の金額

- (1) 決算整理前、支払保険料勘定残高 4,800,000円
- (2) 前払保険料 $4,800,000円 \times 2ヶ月 / 12ヶ月 = 800,000円$
- (3) 決算整理後、支払保険料勘定残高 $(1) - (2) = 4,000,000円$

・ ×2年度

まず、期首に再振替仕訳を行います。前期末に前払いとして処理した保険料を借方、支払保険料と仕訳することで、当期の保険料として計上されるのです。6月1日に保険契約を更新し、改めて1年分の保険料を支払っています。但し、1年分の保険料は改訂されて

います。決算整理前の支払保険料勘定には、期首の再振替仕訳による2ヶ月分の保険料+5月1日に支払った1年分の保険料、合わせて14ヶ月分が計上されています。もちろん、このままでは正しい利益の計算にはなりませんので、翌期にサービスの提供を受ける2ヶ月分を翌期の費用とするため、前払保険料に振り替えます。これが、⑤の仕訳です。

☆ ×2年度の保険料の金額

- (1) 決算整理前、支払保険料勘定残高 $800,000 \text{円} + 5,040,000 \text{円} = 5,840,000 \text{円}$
- (2) 前払保険料 $5,040,000 \text{円} \times 2 \text{ヶ月} / 12 \text{ヶ月} = 840,000 \text{円}$
- (3) 決算整理後、支払保険料勘定残高 $(1) - (2) = 5,000,000 \text{円}$

第10問 応用編⑤（解答）

解答 （配点 各3点 合計9点）

- ① 662,786（円）
- ② 111,111（円）
- ③ 25（円）

計算過程

- ① 売上高 $200 \text{個} \times @1,200 + 350 \text{個} \times @1,207.96 = 662,786 \text{円}$
- ② 移動平均法によった場合の売上総利益
 - 売上高 … 662,786円
 - 売上原価 … 551,675円
 - 売上総利益 … 111,111円

解説

商品の払い出し単価の計算方法に関する問題です。移動平均法と先入先出法のそれぞれにより取引ごとの払い出し単価を算出し、6月の売上原価、月末商品棚卸高を正しく算出できるかがポイントです。

次ページに、両方法によった場合の商品有高帳を示します。

商 品 有 高 帳

(移動平均法)

	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
6	1 前月繰越	100	1,000	100,000				100	1,000	100,000
	3 仕 入	200	1,006	201,200				300	1,004	301,200
	8 売 上				200	1,004	200,800	100	1,004	100,400
	16 仕 入	300	1,002	300,600				400	1,002.5	401,000
	25 売 上				350	1,002.5	350,875	50	1,002.5	50,125
	30 次月繰越				50	1,002.5	50,125			
		600		601,800	600		601,800			
7	1 前月繰越	50	1,002.5	50,125				50	1,002.5	50,125

商 品 有 高 帳

(先入先出法)

	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
6	1 前月繰越	100	1,000	100,000				100	1,000	100,000
	3 仕 入	200	1,006	201,200						
	8 売 上				100	1,000	100,000			
								100	1,006	100,600
	16 仕 入	300	1,002	300,600				300	1,002	300,600
	25 売 上				100	1,006	100,600			
								250	1,002	250,500
	30 次月繰越				50	1,002	50,100			
		600		601,800	600		601,800			
7	1 前月繰越	50	1,002	50,100				50	1002	50,100

本問は、商品有高帳を作成する問題ではありませんので、きれいに作る必要はありませんが、正確に計算を行うため、また商品有高帳を作成する問題の練習にもなりますので、慣れるまでは下書き用紙に商品有高帳の簡易版を書き、丁寧に計算することをお勧めします。

なお、3分法と分記法は記帳方法の違いなので、どちらによっても計算結果は変わりませんが、移動平均法と先入先出法は計算方法の違いですので、どちらによるかで計算結果は異なります。

ご挨拶

ご解答いただいた皆さま、お疲れさまでした。

今回の問題は如何だったでしょうか。今回は2回目の実施になりますので、第1回目のときとはなるべく違う論点からの出題を、ということを考えましたが、やはり3級のメイン論点（売上原価算定（「仕・繰・繰・仕」）、減価償却、貸倒引当金）は外すことができず、これらの論点を中心とした問題になりました。

前回、GWに実施した第1回の問題は、イベント用の問題ということもあり、実際の試験の出題は想定されない問題や、クイズ形式のような問題も入れました。したがって、繰り返し解くような問題ではありません、ということをこの最後のコメントに入れたのですが、それでも嬉しいことに6月に入ってからも「計算大会の問題を解いた」という勉強ツイートをして下さる方がいました。そのようなこともあり、同じ時間を使って解いていただくのなら、実際の試験でも役に立つ問題にしたい、という趣旨で作ったのが今回の問題です。本試験の出題形式とは少し違う問題や、応用的な内容は入れましたが、特に3級に受かったあと2級の勉強もお考えの方、あるいは今2級の勉強をされている方には、最終的には全て解答できるようになっていただきたい問題です。もし、今回の問題を解いて不安があったという方は、テキストや基本的な問題に戻り、重要論点の基礎を盤石にしてください。

以下、第1回目と同じ内容ですが、皆さまにお伝えしたいメッセージです。

メイプルでは、簿記の勉強ではとにかく理解が大事ということを皆様にお伝えしています。テキストの内容を覚えようというのは、一見すると手っ取り早いように感じるかもしれませんが、しかし、無理やり覚えたものというのは忘れやすく、思い出すのにも大変時間がかかります。そして、覚えたのと同じような問題なら解くことができますが、少しひねられると全く対応できなくなってしまいます。

一方、理解を重視した勉強というのは時には時間がかかり遠回りのように思えても、一度理解できたものは忘れにくく、たとえ忘れてしまったとしても、思い出すことは非常に容易です。また、しっかり理解ができていれば、難しい応用問題にも対応することができるようになり、勉強するのが楽しくなります。何より、理解に基づいた知識というものは、試験に合格された後にも色々な場面で必ず役に立ちます。

是非理解することを大切にして勉強を進め、試験合格を勝ち取りましょう！心より応援しております

以上で簿記3級計算大会を終了します。

本日はお忙しい中ご参加いただき、ありがとうございました。😊

簿記の教室メイプル Twitter 校